

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 林 香里

ジャーナリズムという営為は、日本においてはあまたの評論の対象とはなり得ても、学問的方法意識に裏付けられた研究として提示されることはそれほど多かつたとは言えない。本論文はそうした中で、現代におけるジャーナリズムの矛盾と革新をテーマとして、「ジャーナリズム・スタディーズ」の地平を切り開く、画期的な力作である。

Iにおいて本論文の問題意識と方法が明らかなされている。筆者はマスメディアとジャーナリズムの概念的峻別に立ち、その上でマスメディア・システムを舞台として展開されるジャーナリズムに〈マスメディア・ジャーナリズム〉という概念を与え、その「矛盾と革新」の動態を描き出すことを研究の主題とする。そして「マスメディアの周縁にこそジャーナリズムの核心が宿る」との仮説を立て、それを理論的・実証的に検討することを通じて、以下の全体を組み立てている。

「II マスメディアの発達とジャーナリズムの限界」では、〈マスメディア・ジャーナリズム〉の実態および矛盾を大衆化、産業化、システム化という3つの構造的諸契機の出発点によって分析している。それらの契機に対応する争点として、3つの章で、タブロイド化論争、プレスの社会的責任理論、ルーマン理論によるシステム分析を取り上げている。

「III ジャーナリズムの新しい可能性を拓く思想潮流」では、ジャーナリズムの新しい可能性に関わる現代民主主義思想について理論的考察を展開している。4つの章により、ハーバースの公共圏論、デューイのパブリック思想、コミュニタリアニズム論争、デリバラティヴ・デモクラシー論との間できわめてアクチュアルで周到な議論が行われている。

「IV マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心—ジャーナリズム再定義の運動」では、それらの理論的装置を援用しつつ、異なった文化圏の事例研究を通じて〈周縁—核心〉仮説を検証していく。3つの章で、日本の新聞「家庭面」、ベルリンで発行されるオルターナティヴ新聞『ターゲスツァイトング』、米国の「パブリック・ジャーナリズム」運動が取り上げられ、それらを歴史的・文化的文脈の中に据え、また現場調査の成果をも踏まえて詳細に研究している。そして、それらの事例に見られる共通性と固有性を鮮やかに記述する。

そのような3部の中の異なる10章はいずれを取っても単独で十分に完結しており、完成度が高い。その上でそれぞれが全体の中の部分として全体の論理的・一貫性によく貢献している。

以上の構成を取る本論文は、第一に提示された命題の明晰性と現実性において、第二に

研究方法意識の自覚的徹底性において、第三に理論分析と実証研究を進める上での論理の精緻さと一貫性において、第四に政治・社会思想など隣接した知の領域に関する理解の深さにおいて、疑いなく傑出した論文である。とは言え、ジャーナリズム概念の歴史的・言説的分析、〈周縁－核心〉構図の操作の仕方などにおいてなお検討の余地がない訳ではない。しかし、それも本論文の優れた意義を損なうものとは言えず、今後の筆者の研究生活における課題として了解されるべきものであろう。

以上の検討の結果、審査委員会は、本論文が博士（社会情報学）の学位を授与するに値するものとの結論に達した。